令和５年度 福島県立聴覚支援学校会津校

# 第１回 公開学習会 報告

## 「聴覚障がい児のことばの力を育てるために」

７月21日（金）に、秋田大学名誉教授 武田 篤先生を講師にお招きし、第１回公開学習会を開催しました。日頃から連携している医療機関の方や地域の保健師さん、子ども園の先生、保護者の皆さんなど、たくさんの方々に参加していただきました。

武田先生からは、ヘレン・ケラーの言葉から、聞こえないことは、人との関係の中で生きる上で、大きな困難を抱えることになるが、適切なかかわりで、言葉を獲得できること、そして、そのためにかかわりの中で、どんなことに配慮すればよいかをわかりやすくお話していただきました。補聴器も人工内耳も、マイクを通して音やことばをひろうため、原則として、読話も手掛かりにすることができるように、近くで、前から、口元を見せてはなすこと、プロソディやイントネーションを崩さずに話すことがポイントであるとお話があり、参加者一同、日ごろの関わりを振り返るきっかけとなりました。また、コミュニケーションを豊かにするために大切なこととして、次の３つのことがあげられました。

１ 子どものコミュニケーション意欲を引き出すこと

→ そのためには、子どもの伝えたい思いを察する感度を上げ、子どもが何を感じ、思っているかを考えて対応し、子どもから始まるやりとりにつなげるようにします。大人から始まったとしても、できるだけ、子どもが思いを出せるようにすることが必要です。

２ 質より量

→ことばは、実際のやりとりや活動を通して覚えるものなので、ビデオや動画に充てている時間を、普段の家事などを親子で一緒に行う時間にすることでやりとりが増え、生活に必要な言葉を育てることにもなります。

３ 表出を重視

→子どもから要求を出せるようになることが最も大事。Yes-No（はい-いいえ・すき- きらい）、Once more（もう１つ、もう１回）、Which（選択、どっち?）など、子ども本人に主導権があることが大切です。大人の指示に従わせる前に、子どもの要求に大人が応えてあげるようにします。

ことばを育むためのポイント以上に、参加者の心に響いたのが、「ことばは大事。でも幸せに生きていくために、最も大切なものは、自己有用感である。」ということでした。子どもが、自分が誰かの役に立つ、誰かに必要とされる存在だと感じられるようにすることが、豊かな人生を送るために必要だということです。認められ、ほめられることが、聞こうとする力、伝えようとする力になり、ことばの力を育むことになるとのことでした。

自己有用感は、人とのかかわりの中でこそ感じられるものです。学校生活、家庭生活で、教えていただいたことを心に留めて、子どもたちと接していきたいものです。